

「チーム学校」で取り組むことの意義

チームで取り組むことによる学校現場におけるプラスの影響について、『提要』の改定に携わった関西外国語大学の新井 肇 教授は、次の3つを挙げています。

- 1) 学校は教育機関であることを踏まえ、多職種の専門家や関係機関に早めの『相談』を積極的に行うことで、問題の早期解決に努めることができる。
 - 2) 担任一人ではできないことも、教職員や多職種の専門家、関係機関がチームを組み、役割分担することで、指導、支援の幅や可能性が広がる。⇒教職員は子どもへの関わりの密度を高めることができる。（支援者の負担を分散することで支援の質を高める）
 - 3) 多職種の専門家との連携により、学校だけでは対応しきれない部分をカバーしたり、よりよい解決の方向性を見出したりすることができる。⇒教職員の児童生徒理解や支援方法の幅を拡げることにもつながる（異なる発想が交流することで新たな支援策が生み出される）
- 1) 2) は経験などからイメージしやすい効果だと思いますが、私は3) の「教師の指導力向上」につながるという点に、「なるほど～」と感銘を受けました。現在では当たり前になった校内ケース会議にどの程度、教員以外の専門家の参画を促せるか？また、若返り化が進む現在の学校では、ベテラン以上に、若い教員こそケース会議に参加すべきなのかもしれません。それが将来的な学校の力を高めることになりそうです。

最後に、チーム学校を機能させるために求められる姿勢を紹介します。

- ① 一人で抱え込まない
- ② どんなことでも問題を全体に投げかける
- ③ 管理職を中心に、ミドルリーダーが機能するネットワークをつくる
- ④ 同僚間での継続的な振り返り（リフレクション）を大切にする

皆さんの「チーム」、ご自身の姿勢はどうですか？（高橋）



生徒指導 Leaflet @ OKAYAMA リーフ

誰一人取り残さない岡山県の教育に向けて

チーム学校の メンバーは誰？

今や「チームとしての学校」での実践が重要であることは、誰もが認めることでしょう。でも、このように聞かれたら、メンバーとして誰を想像しますか？

もちろん、管理職をはじめとした教職員、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、同じ職場で働くメンバーは「チーム」でなければなりません。でも、本当にそれだけなのでしょうか？『生徒指導提要』では、「チーム」をどのように考えているか見てみましょう。

Q. 「チームとしての学校」は、どのような経緯で生まれた考え方なのですか？

A. 「チームとしての学校（以下、チーム学校）」という言葉は、文部科学省の諮問を受けた中央教育審議会が2015年12月に出した答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」によるとされています。この答申では、チーム学校が求められる背景として、次の3点を挙げています。

- ① 新しい時代に求められる資質・能力を育む教育課程を実現するための体制整備
- ② 児童生徒の抱える複雑化・多様化した問題や課題を解決するための体制整備
- ③ 子供と向き合う時間の確保等（業務の適正化）のための体制整備

いじめ、不登校、貧困問題など、学校現場の課題が多様化・複雑化し、教員だけでは対応が困難になったこと、それに伴い教員の業務負担が増大したことなどが挙げられます。歴史的に見て、日本の教員は特徴として、子ども達の全人的な成長・発達を支えるという役割を担っており、効果を出してきた一方で、役割や業務が際限なく増えるという側面もあるということでしょう。

『生徒指導提要』におけるチーム学校

改定された『生徒指導提要（以下、提要）』でも、チーム学校についてその重要性が述べられています（第3章 チーム学校による生徒指導体制）。具体的には、教職員が「一人で抱え込まない」姿勢を持ち、どんな問題でも学年全体、学校全体で共有することが求められます。また、管理職を中心にミドルリーダーが機能するネットワークを構築し、学校の内外で円滑な情報収集と伝達を行うことも重要です。学校全体で組織的・計画的に生徒指導を実践することを目指すということです。

一方で、児童生徒の人格の形成を助けるために生徒指導・進路指導は必要不可欠であり、これまでどおり学校が担うべき業務と

「チームとしての学校」が求められる背景

日本型学校教育を支える基盤として

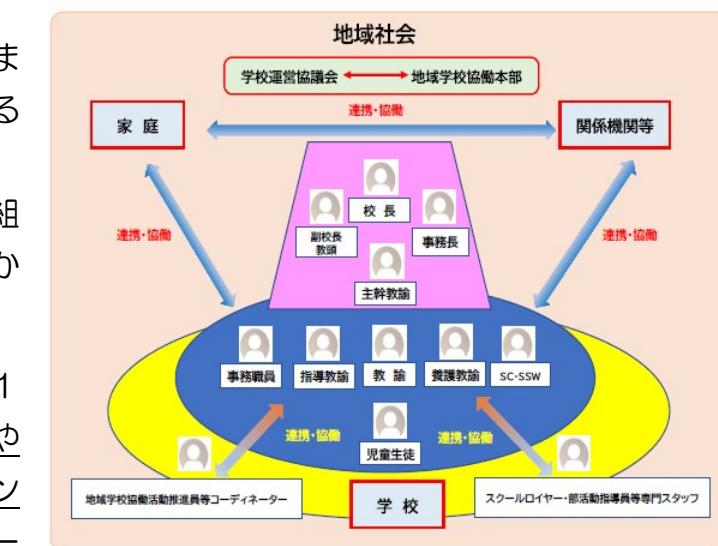
して明示（平成31年中教審答申）されています。学校における「働き方改革」を実現し、教員の負担の軽減を図りつつ、生徒指導の充実を図ることが求められています。チーム学校により生徒指導を充実させることができ、「令和の日本型学校教育」を支えるのです。

チーム学校のメンバーは誰？

ここまで内容からは、「チーム学校」とは、生徒指導を含んだ学校内の教育活動を充実させるための体制やマネジメントについての話のように聞こえるかもしれません。しかし、『提要』にはチーム学校における組織イメージを【図】で示されています。どのような印象を持たれるでしょうか？非常に広範囲で、多様なメンバーで構成された組織になっていることに気がつかれるのではないでしょうか。

ポイントは2つあります。1つ目は、チーム学校は、家庭や関係機関、地域社会も構成メンバーであるという点です。チームメンバーは校内に限らないのです。2つ目のポイントは、「児童生徒」がメンバー（しかも真ん中）として位置付けられているという点です。『提要』が目指すのも「子ども真ん中の学校」なのです。これは「こども基本法」や「子どもの権利条約」などの理念も踏まえ、学校が子どもの意見表明権や参画権を尊重した組織になることが求められると言えるでしょう。ここにも「させる」のではなく、「支える」生徒指導の考え方が生きていると思いませんか？

「チーム学校」のメンバーの範囲を拡げる



【図】チーム学校における組織イメージ



『提要』のダウンロード
はコチラ

POINT

「チーム学校」は、令和の日本型学校教育の基盤

「チーム学校」のメンバーは、学校内に限らないし、大人だけでもない